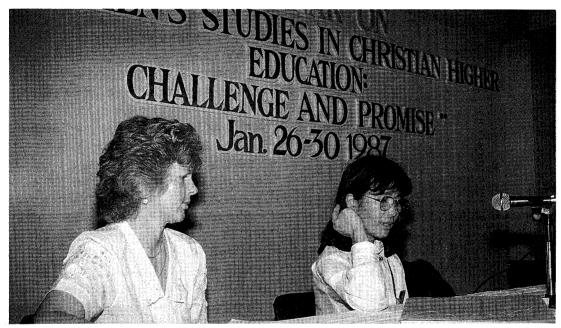
NO.2 March '87

# newsletter

神戸女学院大学 女性学 インスティチュート



Asian Women's Studies Seminar より

# 女性のための法学とは

# 床谷文雄

「法女性学」という言葉がある。弁護士でもある東京 家政大学の金城清子教授は『法女性学のすすめ』という 本 (1983年、有斐閣、改訂版1986年) のまえがきで、「『法 女性学』は、熟さないことばで、耳なれないものかもし れません。これは、女性の視点から、これまでの学問を 見直していこうという『女性学』のなかで、法律的な一 面からの再検討であることを意図して、造語したもので す。男性中心の学問であった法律学も、社会の半分を支 える女性の立場をふまえてはじめて、真の人間の学とし て、人々の自由・平等・独立を保障することができるの ではないでしょうか。」と述べている。日本国憲法の施 行にともない個人の尊厳と両性の平等の原則に基づいて、 多くの法律が廃止されたり、改正されました。しかし現 実には、女性の不利益に機能する法や制度がまだまだ存 在し、多くの女性を苦しめている。このような現状を男 女平等の実現という観点から分析し、望ましいあり方を

考察しようというものである。そこでは、国際人権規約 ・女子差別撤廃条約にみる男女平等、家族と男女平等、 教育と男女平等、雇用と男女平等、社会保障と男女平等、 犯罪と男女平等などが扱われています。もちろん、これ までにも女性の法律上の地位を論じた書物がないわけで はない。戦後の民法改正以後、とくに「家族法上の妻の 地位」についての解説的なものは多いし、批判的な記述 もなされてきた。しかし金城教授は、日本の法律学は男 性の学問(法男性学)であったと、法律学のあり方に問 題を提起するとともに、一般の「女性自身が、法律に強 くなり、法制度改革の方向を考察し、それを実現してい く道を探っていくことは、男女平等を現実のものとして、 摑み取っていくための前提であるばかりでなく、現在の 社会の枠組を組みなおし、よりよい社会を形成していく ために大切なこととなってきています」と、女性の視点 からの法律学の再検討をすすめている。

私が本学で担当する日本国憲法、法学、法律学の授業でも、女性の法的地位に関して、知っていて欲しい、考えてみて欲しいというものを、意識して選択しています。「日本国憲法」における両性の平等の問題はもちろん、

一般教育の「法学」でも結婚、離婚、子どもの問題などは必ずとりあげる。総合文化学科の専門科目である「法律学」では、家族法の講義をしています。そのほか、一年生対象の総合文化入門ゼミでも離婚の問題を取り上げたことがある。しかし正直なところ、思っていたほどには、婚姻や離婚の法律について学生は興味を示しません。「離婚を考える」をテーマにした入門ゼミでは、「私たち結婚もしていないのに、離婚なんて」という声があった。確かに一年生では無理かなとも思う。まだ結婚や離婚ということに現実的な関心がないのかもしれない。しかし、四年生でもそれほど関心が深いとはいえない。今の自分には関係がない、必要になればその時に教えてもらうということですませてしまい、自由にものを考えることのできる今、こうしたことに積極的に取組んでみることをしないのは、いかにももったいない。

私は最近『女性のための法学』という本の一部を執筆する機会を与えられたが、女性のための法学は単に女性に関わる法律知識を与えるだけでなく、今の法制度がもっている問題点を女性として考えるきっかけを与えるようなものでなければならないと思う。法女性学とはいかなくても、男性であってもそれぐらいはできるだろうと思うのだが。先日の女性学講演会では、「夫婦の氏(姓)と戸籍―夫婦別氏制を考える」をテーマに話しをさせていただいた。これも法学の講義でよく取り上げるものの一つである。専門の異なる人や学生さんたちと話し合うと、法律家どうしの議論では得られないような示唆を得ることができる。こういう機会をもっと増やしたいものである(講演会でなく気楽に話し合える場にしたい)。

# 「安んじている女たちよ、起きてわが声を聞け。」 — Asian Women's Studies Seminarに参加して—

# 別 府 恵 子

いまは冬期だというのにブーゲンビリア、多種多様のらんの花、土地の言葉で「オレンヂ色の枝」という陽の色をしたらん科の花が賑やかに咲き競う、タイはチェンマイ。そこでは、ポインセチアまでが灌木になって床上げ式住居の軒の高さにまで成長している。そのチェンマイで、1月26日から30日まで、アジア女性学セミナー(Asian Women's Studies Seminar)が開催された。今回のセミナーの課題は「アジアのキリスト教主義大学における女性学――挑戦と約束――」。AWI 加盟の大学、教育機関から派遣された約40名の女性学の研究者や教育者たちが、Payap 大学(北の大学という意味)のゲストハ

ウスで、五日間寝食を共にして、いま私たちに何が出来 るか、熱心に討議、歓談し合った。

一日のスケジュールは、朝8時半のメディテーション (簡単な礼拝) に始まり、9時から昼食をはさんで、夕 食後は夜の9時まで、全体討議、グループ・セッション、 ワークショップなど、ぎっしりと準備され、和気あいあ いのなかにも慎剣に意見の交換が行われた。全体討議は、 発題者のあるもの、また各々の代表がその体験を披露、 そして質疑応答という形式のものなど画一的でなく、内 容、形式とも変化に富み、参加者全員が参与し、各国独 自のあるいは共通の問題を分かち合えたことは今回のセ ミナーの大きな収穫だったと思う。なかでも私個人にと って最も感銘深かったのは、チェンマイの女たちの生活 を恒間見ることができた "exposure trip" ----五つのグ ループに分かれ、異った地域への見学――と、その体験 を表現する芸術的試み(=painting a mural)であった。 ちなみに私が参加したグループは、会場から30km離れた スリーナームという村の女たちの教会活動を見学、彼女 たち(男性二人を含めて)と語り合ったことをパントマ イムにして事情報告をしたのである。勿論、それで彼女 たちの生活や問題が把握できたという積りはないが、と ても貴重な経験をしたと感謝している。あと紙面の許す かぎり、セミナーに参加して再認識した点をふたつ程報 告させていただきたい。

第一は、私のなかの"アジア"ということであり、"Asian Women's Studies Seminar"と銘うってある"Asian Women's Studies"なるものは何かという問題である。 会議に代表を派遣した東南アジア諸国――香港、インド、 インドネシア、日本、韓国、中国、フィリピン、マレー シア、タイ――はそれぞれ固有の文化、政治体制を有し、 言語体系も異なっている。だが、奇好なことにセミナー の公用語は英語である。翻ってみれば"Women's Studies" 自体、欧米から移入された学問、概念である。しかし、 セミナーに参加した女性学関係者たちは "Women's Studies"を足がかりに、各々の国の文化、政治、社会 問題を検討し、自らの identity を確認することはあって も、借入したイデオロギーに毒されてはいない。そして、 彼女たちが勇気をもって現状を認識し、その挑戦を受け、 したたかに、しなやかに根深い因習や種々な差別問題に 対処しているのをみてうれしかった。これまで専門の関 係上、私の関心や研究対象は欧米とその文化一辺倒であ ったが、今回タイに旅して、また東南アジア各国の代表 たちと一堂に会して感じたことは、私も彼らと同質の文 化を呼吸しているという発見が自明のことながら斬新だ った。英語圏を旅行する時と違って、言葉は理解出来な

いのに不思議と神経が安らぐのであった。

第二の点は、キリスト教主義の大学で女子教育に携わ る者としての責任ということである。現在では日本にお ける女性学もかなり普及してきたが、わが国の高等教育 制度の下では、学問・研究とその実践とは別個に考えら れる嫌いがある。勿論、それはそれで良いのだが、今回 のセミナーで知らされたアジア諸国での実状はかなり刺 戟的であった。この報告のタイトルに引用したイザヤ書 の一節は、あるフィリピンの神学者が発題講演の一つで 使用された聖句であるが、それを私もここで反復したい。 私自身への挑戦の言葉として。神がイスラエルの「安ん じている女たち」に投げかけられたすすめの深い意義を いまいちど考えたいと思う。女子の高等教育に携わる者 が、まず自分自身の "consciousness raising" を始めな ければならないし、若い世代の意識の啓蒙に務めなけれ ばならない。女性学がその実践の場として用いられるこ とが大いにあって然るべきだと思う。いまの私たちは、 実に「安んじている女たち」であり、「思煩いのない娘 たち」ではないだろうか。チェンマイの会議でも感じた ことだが、アジアの人々が抱いている"富める日本" "Toyota の日本" "Ajinomoto の日本" といったイメー ジは"醜い日本"と同義語である。私たちが、問題意識 を持つことが、しいてはアジアの隣人諸国の人々が、日 本に対して抱いている歪曲したイメージの是正にもつな がっていくのではないだろうか。なぜなら、決して日本 は、彼らの見るように、富める国でもないし、まして、 私たちは醜い日本人と誤解されたくないのだから。

# ASIAN WOMEN'S STUDIES SEMINAR REPORT Payap University, Chiang Mai, Thailand January 26-30, 1987 by Catherine Broderick

What was the purpose of the Asian Women's Studies Seminar?

The theme of the Asian Women's Studies Seminar was:

Women's Studies in Christian Schools in Asia: Prob-

lems, Prospects and Challenges and it highlights the task that the approximately thirty-six women educators from about twenty Christian women's colleges in Asia set

themselves. The seminar logo, a cross of green lotus petals encircled by gold cres-

petals encircled by gold crescent moons, was explained by Theresa Balayon as indicating our emphasis on



Christian values (the cross ), on the centrality of women (the moon ), on synthesis through women's studies (the circle), on changing one's consciousness of self and reality through women's studies (the circle as Oriental mandala), and on the fecundity and growth to emerge from our sharing (the lotus). The Seminar was designed "to bring together a small group of women educators from selected Christian colleges and universities in Asia to discuss their experiments in developing women's studies programs and to come up with models that could be replicated in other schools."

### What happened at the Asian Women's Studies Seminar?

There were four main directions of activity at the seminar: the first was the Christian worship services held at the opening and closing of the seminar as well as each morning before programs began. These services were led by women from a different country each time, and they reflected a unique culture as well as a common belief. Secondly, there were two major papers - "Women's Education in Ferment: Why Women's Studies in Asia" by Theresa Balayon and "A Challenge to Bias and Prejudice: The Religious Dimension of Women's Studies" by Elizabeth Dominguez -- and reports from each participating college about programs developed, curricula created, texts written, and obstacles met and overcome. These meetings were held in a conference room in which all the women, participants as well as moderators and speakers, sat on the same level no raised platforms - and we all sat in a U-shaped arrangement of tables in a circular, sharing, communicative atmosphere for all our programs. The seminar enacted the principles of equality and sisterhood of women's studies throughout its proceedings. The third direction of activity was the exposure trips taken by small groups to visit villages or factories or brothels in order to see the lives of real women, to talk to village women struggling to improve their economic level, or factory women who work very hard for low wages, or prostitutes whose lives and stories affected us most poignantly. These exposure visits were reported by means of creative explanations, such as skits, murals, posters, and poems, rather than by factual verbal reports. The fourth area of activity was the socialization among the women participants - the shopping trips together to the night bazaar or the visit to a local temple or a walk through Chiang Mai University campus, and also



the meals taken in common but always with different companions as all the participants mingled and learned more about women in cultures different from their own.

# What impressed me most during the seminar?

I was first impressed by Elizabeth Dominguez's womanoriented theological discussion, in which she cited feminine
images of God such as the striking passage in Deuteronomy
where God is depicted as a mother eagle who drops her
young into mid-air while teaching them to fly, but swiftly
moves under them to catch them as they fall. The
risk/challenge and protection/support provided by God as
a mother image is further seen in the nurturing image of
God holding an infant in "the" everlasting arms as the
original Hebrew text tells us rather than "His" arms in
modern renditions.

I was impressed by the five-to-ten-year old history of women's studies in some Asian women's universities and by the community-based women's studies practiced in a majority of the colleges with active women's studies programs which respond to the problems of women in Asia. These universities are not "remaining on the fringes of social change," but involving themselves directly in empowering women to act positively in social change in their own cultures. I was impressed by the textbooks that have been written at some universities, and by the exchanges and communication that work among Asian women's colleges. I was impressed by the community activities, such as adopting a village or working with women in rural development or with the urban poor and prostitutes that many of these Christian women's studies programs undertake. I was impressed by the involvement of students in women's studies within and without the university, especially in the "part work and part study" type of programs we heard about that exist in China or India. I was impressed at the refusal of "curriculum as control" of students in women's studies programs and the use of strategies such as learning contracts with the students in which a student defines her own goals in the course and is responsible for meeting them. My own personal strategy, that of creating forums through which women are empowered to use their own voice, was one I was impressed to find very common among women's studies programs in Asia and one I hope will be used as a

model in developing methods in Japan.

#### What did I learn from the Seminar?

I learned that Japan has a unique situation in Asia and is challenged to develop not only an Asian women's perspective that includes an understanding of Asian women in all cultures but at the same time a Japanese women's perspective on women's studies. I learned that because the study of women (as objects) is not women's studies (i.e., studying women as subjects), many Asian women's studies programs use the actual experiences of women in the non-academic world as material for classroom teaching, making their women's studies programs relevant to the society in which their students live. I learned that consciousness raising in Asia springs in part from the Chinese "speak bitterness" campaigns and not entirely from Western influences, and that Asian women's studies has been nourished by Western models but also has grown from very strong native roots. Women's Studies in Asia is not "another form of cultural imperialism" and is responding to the need for empirical data from Asian cultures to dispel popular mistaken ideas about women in these cultures as well as to work with women as they emerge in the mainstream of their changing societies. I learned about two important pioneering Asian women's studies efforts -- that of Manushi magazine in India and of the mainland Chinese women's mutual support and study in recent years as well as throughout their history. I learned an enormous amount of detail about women's studies programs, case studies, research projects and curricula development. These materials are all available in the Women's Studies Institute of Kobe College and would make valuable reading for anyone searching as I was when I went to the Seminar for the meaning and reality of Asian Women's Studies.

# • 女性学インスティチュート資料室

当資料室には600冊以上の本、40以上の雑誌、そして新聞、ビデオ、スライド等がありますので気軽にご利用下さい。場所はD館3階の303号室です。

արագարան անագարաց արաց արաց արագարացացարարարարարացությանը և

• 『女性学評論』創刊号が3月末に発行されますのでご 高覧下さい。

# 梨花女子大学百周年記念式典に出席して 高 瀬 ふみ子

昨年5月26日、韓国ソウル市にある梨花女子大学に出 張いたしました。世界最大の女子大ということで、六甲 山全体が大学構内となっているような印象をうけました。 正門を入り、蔦の茂った、古い石造りの校舎を見て、ふ と、アメリカの母校をなつかしく思い出す間もなく、嶮 しい崖登り後、大講堂に案内されました。百数十名のア メリカ人後援者、多数のアメリカ在住の卒業生とその家 族・教職員、一万人を越す学生列席のもとに記念式典の 開会式が行なわれました。すべて韓国語であったので、 私達はイヤホーンで英語をきき内容を知らされたのです が、ときおり、長い沈黙があり当惑いたしました。礼拝、 院長あいさつ、その後、卒業生であり、韓国最初の裁判 官に任命された80才を越えた Lee Tae-Young 博士の講演 がありました。「韓国女性と大学教育」と題するもので、 百年前ただ一人の卒業生を送り出して以来、日本軍占領、 朝鮮戦争の苦難に堪え、現在19,000名の学生を擁する総 合大学となった歴史を語り、韓国女性高等教育の未来は、 民主主義に基く自由、平等の世界共同体建設の担い手を 養成することにある。「もし、学生諸姉が、このことを 知らないと言うなら、今まで、この大学で何をしていた のか。知っていて実践しないなら"O you, sinners!"と 言った、学生、同窓生、教職員の責任と自負の念を鼓舞 する熱弁でありました。予定時間をはるかに越えたため か、シンポジウムはなく、直ぐにバスに乗って昼食会出 席、山越え谷越えの構内案内、学生による「夏の夜の夢」 英語劇鑑賞―パックが、とんぼ返りで苦労したことなど 出演者と楽しく話し合い一その後、ホテルで休憩、夜は、 前院長宅での晩餐会、市内の劇場での韓国舞踊見学とい った過密スケジュールで一日が暮れました。27日には、 バスで、ソウル郊外の "Folk Villege" 一伝統的農村の 保存地―ヘピクニック。何校かの小学生も遠足にきてい まして、手真似で話したり、お辨当の「おすし」に似た 食物の写真をとらせてもらったりしました。映画のロケ 隊も忙がしく動いていました。帰途、アメリカ人教授や 「ニューヨーク・タイムズ」紙のリポーター等と世相に ついて話しましたが、何れも、「アメリカの家庭は、崩 壊していない。ハリウッドと混合してはいけない」と厳 しく言われました。バス運転手が、「アリラン」などに 素晴しいテノールを披露して、私達の拍手を浴びました。 午後は、院長招待のリセプション、百年史の写真展、夜 は、院長公舎での晩餐会がありました。学生のコーラス、 伝統的な「動」と「静」の舞踊、梨花女子大学と同い年

である百才のアメリカ人学者のごあいさつ等、楽しい時をすごしました。私はただ一人の日本人でしたので、知り合ったアメリカ人教授達は、可成り心配して下さいましたが、韓国の方達とも仲良くなり、最初の間は英語、信用すると日本語で話しかけたり、キムチや肉料理を私の皿に入れて下さったり、親切にしていただきました。バス旅行で知り合った、リポーターのお母上が、ニューヨーク在住の梨花女子大理事、元学部長で、自ら、和の食卓に来られ、丹部名誉教授のミシガン大学時代の御友人で50年ぶりにお互の消息が分かるという奇蹟的出来事もありました。梨花女子大学では女性教授が中心となって活躍、院長、学部長も殆んど女性教授のようでした。学生は結婚したら退学するのだという事で、私が学生が文句を言わないのかと心配しますと、「学生は規則を知って入学してきます」とのお答えでした。

28日午前中は行事がなく、私は、ホテルのソウル見学ツアーに参加しました。公設市場、王宮寺、若い韓国女性ガイドの英語説明にも、到る所にある立札にも日本人の残虐行為が英語とハングルで書かれていました。私は、ただ一人の日本人メンバーとして、韓国の傷が、いまだに血をしたたらせているのを目のあたりに見る思いがしました。ツアー仲間のインド人が日本を賞めちぎって下さったのですが、私は日本人だとは言えませんでした。ガイド嬢が執拗に「何国人」かと尋ねたのですが、「guess!」と逃げ、最後に仕方なく「日本人よ」と告白しますと、彼女は、あっさりと「日本人が英語をしゃべるとは知らなかった」とだけ言ったのでホッとしました。3日間の短い旅であり、大阪空港から1時間20分たらずのところにある韓国と日本は、宗教、道徳、食生活に

ずのところにある韓国と日本は、宗教、道徳、食生活にも断ち切れない絆があると痛感しました。私は、また、梨花女子大学に畠中博6代院長の女子教育についての御理念の面影をみたように思いました。日本が豊かさのなかに伝統が姿を消し去ろうとする時、隣国では他国に潰された伝統を再築し、保存し、それを基盤に新しい民主主義国家として大発展をとげつつあることに、AWIメンバー校である神戸女学院大学は、多くを学ばねばならないのではないでしょうか。

# 活 動 報 告

# 1986年度

◎シンポジウム 5月19日

『留学生からみた日本の女子大生』

司会:高瀬ふみ子教授

発題者:Miss Katherine Breer (Mount Holyoke College, 同志社大学留学)



#### 5月19日のシンポジウムより



Miss Christine Marley (Women's Christian College, India, AWI 交換留学生)

## ◎第1回講演会 5月27日

『女性学のすすめ』 上野千鶴子氏

(平安女学院短期大学助教授)

#### ◎第2回講演会 7月7日

『1970年以降のアメリカのフェミニズム―性別役割の 変容』

國信潤子氏(関西学院大学非常勤講師)

アメリカの女性解放運動は、1900年代はじめと1960年 代後半以降の二つがあり、後者は60年代の黒人解放や学 生運動の高まりの中から出てきたものである。

70年代に入って、「女にとって家事、育児が重要な役割である」という考え方に変化があらわれた。これは立法や裁判所の判例などに見ることができる。たとえば、教育や雇用の機会均等、離婚した父親の養育権、夫が妻の扶養家族になることなどの判例である。

ところが、80年代になって、フェミニズムは社会全体の右傾化の影響を受ける。たとえば、1982年のERA(法律上の完全な男女平等を達成しようとする憲法修正)の失敗は、ニューライトと言われる人たちの巻き返しによるところが大きい。また各地のウーマンズセンターやウーマンズクリニックの閉鎖もおこっている。他方、現在直面している問題として、貧困の女性化(Feminization of Poverty)、つまり貧困層の中で女と子供の占める割合が増えたことがある。

# ◎第3回講演会 10月29日

『「若い女性」に対する社会的まなざし:〈知性〉〈母性〉〈魔性〉一ファンタジーまたはエロスの世界への浮遊』 柳原佳子氏(神戸女学院大学非常勤講師)

若い女性に期待されるモデルとして、〈有能者〉〈養育者〉〈誘惑者〉がある。これらの属性は、時には他を排除しあうものではあるが、日常あいまいな形で一人の女性に三つが同時に期待される。このような女性のモデルが位置づけられる社会的空間は、〈職場・学校〉〈家庭〉〈第3「自由」空間〉である。このようなステレオタイ

プ的な女性モデルにとらわれないことが (「一般論」からの離脱)、女性にとって息のしやすいライフスタイルをつくり出していくための戦略である。

#### ◎第4回講演会 11月19日

『日本女性史の研究に没頭した高群逸枝について』

粟飯原敬江氏(神戸女学院大学非常勤講師)

『女性解放思想の歩み」(水田瑞枝著、岩波書店)の中で「女性史は成立するか」という問いを立て、その「成立」に疑問を呈しているが、これは高群の研究の意義が十分に評価されていない。高群は膨大な資料を集収し、母系制招婿婚、婚姻史や女性の歴史などを研究し、全十巻を残した。

若い頃、アナキズムに傾倒していた高群は、アナキズムから神道へという思想的変遷をたどるなかで、女性史への関心を強めた。そこにはいくつかの柔盾はあるが、彼女が日本女性史研究のパイオニアであることは忘れさるべきではない。

# ◎第5回講演会 1987年1月29日

『夫婦の氏(姓)と戸籍―夫婦別氏制を考える』

床谷文雄氏(神戸女学院大学助教授)

平民に苗字が許されたのが明治3年、そして明治民法 (明治31年)によって、妻が夫の氏を称することが義務 づけられた。これが昭和23年、夫婦が婚姻によって、夫 又は妻の氏のどちらを称してもよいことになった。しかし、一般には、このことがよく知られてはいない。「結婚するとき、夫婦はどちらの氏を称することになっていると思うか?」という質問に対して、正しい民法の知識をもっていたのは、一般女性で53.6%、専門職女性では80.7%、男性でも52.5%である。

夫婦別氏を主張する根拠として、夫婦**同**氏制が女性の一方的不利益をもたらし、女性差別となることがあげられる。しかし、別氏制実施上の問題点として、子供の氏の決定や戸籍編成をどうするかということがある。

戸籍とのかかわりが大きな障害となっていた養子法の 改正が、最近一部成立した。こうした法改正には世論が 影響する。夫婦別氏の問題も、同様に国民の関心と声の 高まりが必要である。

abitabit ab

#### 女性学インスティチュート Newsletter 編集委員

別府恵子、C、ブロデリック、小関三平、大利一雄(ABC順)

編集:神戸女学院大学女性学インスティチュート

発行: ●662 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)53-0955(代)